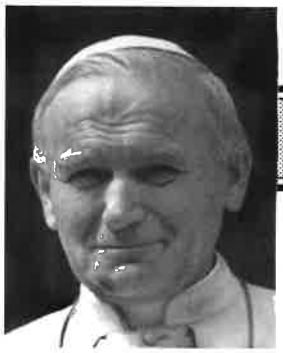
平成10年（1998年）5月10日発行　第217号　（昭和59年10月1日第三種郵便物認可）



教皇様の聲 5 217号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1998

「聖霊降臨を待つマリア」　聖霊シリーズ　4

1　「…婦人たちとイエズスの母マリアとイエズスの兄弟たちと共に、みな心を合わせて祈り続けていた。」（使徒行録1・14）この簡単な描写で、使徒行録の著者はキリストの母が聖霊降臨までの日々、高間におられたことを記録しています。

イエズスが御父のもとへ帰る前に命じておかれたように、使徒たちは高間に集まり、「心を合わせて祈って」いました。彼らだけでなく、男女合わせた他の弟子たちも一緒でした。エルサレムでの最初の共同体を構成するこれらの人々の中に、著者ルカはキリストの母マリアの名をも記しています。居合わせた人々の中で、マリアに関する特別の言及はありませんが、ルカは自分の福音書に処女マリアの神的な母性について詳しく記しました。それは、ルカが厳密な方法論に基づいてキリスト信者の共同体の中から集めた資料によるものでした。その資料は、少なくとも間接的にはマリアに関する最も早い時期のもので、イエズスの母ご自身にまでさかのぼることができます。従ってルカの記述は、神の御子のこの世への到来をマリアという人物と密接に関係づけました。同様に、教会の誕生もマリアと結び付けられています。聖霊降臨の時、マリアが高間におられたという簡潔な記述は、ルカがこの事実に大きな重要性を認めていたことをうかがわせるに十分です。

2　使徒行録は、生まれ出ようとしている最初の教会共同体の一員として、マリアが聖霊降臨を待つ人々の中にいたことを明らかにしています。ルカの福音書や他の新約聖書本文をもとに、教会におけるマリアの現存というキリスト教の伝統ができあがりました。第二バチカン公会議はマリアを「教会の卓越した全く独特な成員」（教会憲章53番）と呼んで賛えています。それはマリアが人であり神であるキリストの母、従って神の御母であるからなのです。公会議の教父たちは序で、すでに述べた使徒行録の言葉を思い起こしています。教会の始まる時そこにおられたマリアが、あの高間での共同体を引き継いで二十世紀の後半に集う使徒の後継者たちの間にも現存してくださるよう願っていることを強調するかのようです。公会議に集まった教父たちは、「イエズスの母マリアとイエズスの兄弟たちと共に、みな心を合わせて祈る」（使徒行録1・14）ことをも望んでいました。

3　お告げの時、マリアは聖霊の降下を体験しました。天使ガブリエルは「聖霊があなたにくだり、いと高きものの力の影があなたを覆うのです。ですから、生まれる子は聖なる御方で、神の子と呼ばれます」（ルカ1・35）と告げていました。聖霊が彼女に降ったことで、マリアは独自の方法でキリストの秘義と結ばれたのです。回勅『救い主の母』に書いたように、「キリストの秘義の中では、マリアは『世界創造以前から』（エフェゾ1・4参照）すでに存在していました。御父が、御子の受肉に際して、その母に選んでおられた者だったからです。さらには御子も御父と共に、マリアを選び、聖霊に委ねられました。」（8番）

4　エルサレムの高間で、この世でのキリストの過越の秘義が成就した時、マリアは教会の誕生を画した聖霊の新たな訪れを待つ他の弟子たちと共にいました。恩寵に満たされ、神の母であるマリアが、すでに「聖霊の住む場所」（教会憲章53番）であったのは事実ですが、彼女は聖霊の到来を求める祈りに加わりました。イエズス・キリストが世に来られる時（ヨハネ5・36参照）御父から受け、御父のもとに戻る時教会に委ねられた（同17・18参照）使命への力が、聖霊の力によって使徒の共同体に注がれることを願ったのです。マリアは最初から、御子の「弟子」として、また信仰と愛の点で教会の最も輝かしい模範として（教会憲章53番参照）、教会と結ばれています。

5　第二バチカン公会議は、教会憲章の中で強調しています。「聖なる処女は神の母の賜物と役割とによって贖い主である子と結ばれ、特別の数々の恩寵と務めによって教会とも密接に結ばれている。すなわちすでに聖アンブロジウスが教えたように、神の母は信仰と愛とキリストとの完全な一致の領域において、

教会の象形である。…その教会の秘義の中において、聖なる処女は卓越した…範型を示しつつ第一位を占めたのである。マリアは信じ従い…男を知らず、聖霊におおわれ、…父の子自身を地上に生んだ。」（63番）

聖霊降臨を待つ間の高間でのマリアの祈りには特別な意味があります。他ならぬ、託身の秘義の瞬間に成立した聖霊とマリアとのきずなのゆえです。そして今、そのきずなは新しい言及点によって強められたのです。

特別の仲介

6 マリアが信仰の点で「卓越している」と述べた公会議は、エリザベトがいとこであるナザレトの処女を迎えた言葉「幸いなこと、信じた方は」（ルカ1・45）を思い起こしているかのようです。福音史家は「エリザベトは聖霊に満たされて」（同1・41）マリアの挨拶に答え、叫んだと書いています。さらに、同じルカによると、聖霊降臨の日、エルサレムの高間で「彼らはみな聖霊に満たされた。」（使徒行録2・4）すなわち、「聖霊によってみごもっているのがわかった」（マテオ1・18）マリアは、ペンテコステの日、新たに聖霊に満たされたのです。それ以来、マリアの信仰と愛徳とキリストとの完全な一致の旅路は、教会自身の旅路と結び合わされました。

使徒たちの共同体にはマリアの存在が必要でしたし、主の御母であるマリアと共に熱心に祈ることが必要でした。「マリアと一緒に」祈る人は、満ちあふれる聖霊の賜物に由来する、聖母の特別な取り成しを感じることができます。聖霊の神秘的な花嫁マリアは、槍で貫かれたキリストの脇腹から生まれ、今や世に現われようとしている教会の上に聖霊の到来を願います。

7 ルカが使徒行録に記した短い記述からわかるように、マリアは使徒たちと聖霊降臨を前に「祈りに専念する」全ての人々の間におられます。これはとても意味深いことです。

「教会憲章」の中で、第二バチカン公会議はその意義について述べました。それによると、高間で使徒たちの中心にあって祈りに専念しておられたのは、「多くの兄弟の長子」（ローマ8・29参照）として神が定めた御子の母です。公会議はさらに加えて、マリア自身はキリストのこの「兄弟たちを生み育てる」ために母の愛をもって協力している、と述べています。一方、教会は聖霊降臨の日以来、「宣教と洗礼をもって、聖霊によって懐胎され、神から生まれた子供たちを生み」（教会憲章64番）ます。従って教会は、このように自分が母となることで、キリストの御母を模範として仰ぎます。それはすでにあの高間から始まっていたのでした。（89・6・28）

召し出しの種を大切に！（ローマ神学校の終業式にて）

「神の国は土地に種をまいた人のようである。」（マルコ4・26）神学校（seminary）という名称は、キリストのこの言葉に由来します。ラテン語のseminariumは「種」（semen）から来た言葉です。イエズスは、土地にまかれた種が、人が見ていようが寝ていようが関係なく芽を出して育つと仰せになります。種は日夜はえ出て育ちます。「土地は自然に実を結び、はじめは苗、それから穂、それから穂の中に豊かな実が実る。」（マルコ4・28）

司祭への召命との類似は明らかです。召命は、人間の心に神がまかれる種のようです。それは種自身の力で芽を出します。しかし種が育つためには、世話が必要です。種をまくのは人間です。種が育つよう見守るのも人間です。害を及ぼすもの、悪人や自然災害から、育ちつつある若芽が傷つけられないよう守らなければなりません。芽がすっかり成長した時、キリストの言葉に従って人は鎌を取ります。「取り入れの時が来た」（マルコ4・29）からです。

他の機会にイエズスは言われました。「刈り入れは多いが、働く人は少ない。だから刈り入れの主に、働き人を刈り入れに遣わしたまえと祈れ。」（マテオ9・37～38）この言葉は神学校にも向けられています。神学校は働き人を訓練して、全ての国と大陸にまたがる大いなる神の御国の収穫へと遣わすための所だからです。今日、神学校の終業式に当たり、もう一度キリストのたとえ話を聞くのは良いことです。

いま聞いた福音には、また別のたとえ話があります。神学校の一年を終える皆さんにとって、大事な話です。キリストは言われます。「神の国を何になぞらえ、どんなたとえをもって言い表わそうか？」（マルコ4・30）その答えは、「一粒のからし種のようである。土地にまく時には地上のどんな種よりも小さいが、まかれると育ち、どんな野菜よりも大きくなり、空の鳥が陰に身を寄せるほど大きな枝を張る。」（4・31～32）これはエゼキエルの言葉を引いたものです。二つの話は一つのこと、すなわちこの世の歴史の中で育つ神の御国について述べています。別のたとえでは、それらは若者の霊魂の中での司祭への召命のこととともとれます。これこそ神学校の任務です。学年末に当たり、私たちはこの数カ月間に聖霊が召し出しを受

けた一人ひとりの霊魂の中で行なわれた偉大なわざを振り返ってみる機会に恵まれています。多くの人が聖霊に協力して、神がまかれた召命の種が実を結ぶよう、この世での神の御国の成長を助けています。このようにして教会は、空の鳥や疲れた人が身を寄せることのできる大きな枝を張った木に成長します。

このたとえ話は、神の木が大きく育ち、世界中のあらゆる国々に届くまで枝を伸ばすようにという希望を込めて、神学校の一年間の仕事について考えさせます。この点から考えるとローマの神学校の役割は重大です。ペトロの後継者の座であるローマは、全世界での宣教活動を推し進める力ではないでしょうか？

聖パウロも、コリント人への手紙の一節で司祭の形成という問題を深く理解するための機会を与えてくれます。「私たちははっきり見ずに信仰によって歩んでいる。」(IIコリント５・７）　さらに「恐れることなく主とともに住むために、私たちはこの体から出ることを望んでいる。」(同５・８）　神学校での形成は、キリスト信者、特に司祭の生活の基礎となる神学的な徳を身につけるための教育に他なりません。これらの徳のうち最も大切なのは愛です。(Iコリント13・13参照）　使徒が言いたかったのは愛のことではないでしょうか。「この体があるにしろ、それから出るにしろ、神に嘉されることだけを私たちは念願としている。」(IIコリント５・９）

学年の終わりに当たり、使徒は皆さんの一人ひとりに尋ねているようです。この一年、あなたはどのように信仰・希望・愛に成長したでしょうか？聖霊の賜物である上智、聰明、賢慮、剛毅、知識、孝愛、敬畏をどのように深めてきたでしょうか？この神的賜物は私たちの精神に、理解力に、心の望みの中に、どれだけ深く根付いたでしょうか？「私たちはみな、キリストの審判の前で正体を現わし、おのおのがその体で行なったことの善悪に従って報いを受ける。」(IIコリント５・10）　日ごと、年ごと、このような最後の時のことを考えて、良心の糾明を行なわなければなりません。全ての怠慢について赦しを願う必要がありますが、何よりも、感謝しなければなりません。本日の典礼は、詩篇の言葉を借りて感謝を捧げるよう、促しています。「いと高き者よ、主をほめまつること、み名を賛美することはよい。」(詩篇92[91]・１）　神の恩寵と私たちの協力によって、この一年間に実を結んだ事柄に対して、賛美の歌を捧げましょう。

今日、私たちはバチカンの丘のルルドの聖母の洞窟の前に集まっています。詩篇の言葉が私たちの心に響きますように。

「正しい者はしゅろのように栄え、レバノンの杉のように育ち、主の家に移され、われらの神の門に茂る。」（詩篇92[91]・13～14）

この一節が、福音に仕えるという召命について考える時の助けとなりますように。

神の御国建設のため日々働く私たちに、聖なる使徒ペトロとパウロ、またローマにいる教会の全ての聖人と福者が付き添って助けてくれますように。使徒と聖人たちは忠実にキリストに従って歩む私たちの先達、輝ける模範です。　（97・６・15）

教皇さまの動き

●４・５　枝の主日。世界各国からの数万人の若者が、聖ペトロ広場で教皇さまと共にミサにあずかり、第13回世界若者の日を祝った。

「本日の典礼は、復活祭を前にしてイエズスのエルサレム入城をしのばせてくれます。イエズスはそれが死への凱旋であり、王冠ではなくいばらの冠を受けるであろうことを承知していました。」世界若者の日は、例年枝の主日に開催される。「教会が他ならぬこの日、若者たちに特別の注目を向けるのは、２千年前、キリストのエルサレム入城を歓呼して迎えたのが若者たちであったからです。」

●同日、聖ペトロ広場でお告げの祈り。

「間もなくフランスの若者たちからイタリアの兄弟たちへ、大十字架の引き継ぎが行なわれます。２千年のローマでの世界若者の日の祝典の焦点となる十字架です。」「大十字架はこれからイタリアの町々、諸教区を巡回しますので、イタリアの若者諸君にとっては大聖年に向けた願ってもない巡礼の機会となるでしょう。皆さんの心と生活において十字架を受けとめ、その死と復活のメッセージを聞き、良心的で責任ある証人となってください。」　教皇さまは最後に各国語で、集まった若者たちとテレビ・ラジオを通して参加している世界中の人々に挨拶された。

●４・６　教皇さまからグルジア共和国トビリシの病人たちに贈られた「人類の贖い主」病院の開設に当たって、メッセージが公表された。

教皇さまは、人の尊厳がキリストに根ざすものであって、民族の違いや生活状態に関わるものではないことを示すため、新しい病院に最初の回勅（「人類の贖い主」）と同じ名前を希望されたということである。なお、教皇庁は開設式に出席した東方教会の代表者たち、カリタスのイタリア支部、病人の霊的な世話に当

たる修道会の人々に感謝を表した。「これらの人々の存在は、何世紀にもわたってキリスト教信仰を守り、殉教者をも生んできたグルジアの信者たちへのカトリック教会全体の関心の強さを物語っています。」 メッセージの締めくくりとして、「この病院がグルジアの人々にとって、私の愛情の具体的なしるしとなり、キリストの弟子たちが示すべき、苦しむ人への愛の生きた表われとなることを望みます。」

●4・7　60ヶ国からの学生たちを迎えて。

教皇さまはUNIV（世界学生会議）のためローマにやって来た学生と教授たちにお話しになった。「人間人格の諸権利はあらゆる秩序の鍵となる大切な要素です。人権は、究極の真・善である神に基づいた普遍的な道徳法の存在の必然性を反映しています。だからこそ人権が人間の作るあらゆる組織の基盤であり、規準であると言えるのです。人権に基づかなければ、人間に相応しい社会を築くことはできません。」「世界には多種多様な抑圧が存在しますが、教会はそれらを非難してはばかりません。愛と正義を求める戦いは今後も続くでしょう。そうしなければ、教会はイエズスが託された使命を忠実に果たしているとは言えなくなります。人間が危険にさらされている時、キリスト自らがその御名において声を高めるよう、信者を駆り立てられることでしょう。」「なぜ教会はこのように人権問題に熱心なのでしょうか？その答えは、私にとって非常に耳に親しいこの言葉にあります。〈人間は、教会がその使命を果たすために通るべき最初の道である。〉」「人間は神の創造物ですから、人権の源は神にあります。大胆な言い方ですが、人間の権利は神の権利でもあると言えるのではないでしょうか。ですから、人権への配慮と促進は教会の使命の核心です。教会は、人間を害するあらゆる悪を退けます。それが創造主に反する罪であると知っているからです。」「教会は、権利と共に義務をも重視します。キリスト信者の良心には義務という概念が深く刻まれています。…良心は真の自由への道ですが、それは良心の奥底に刻まれた〈神の権利〉を認めるかどうかにかかっています。良心は神ご自身の証人であり、神の声と裁きは人間の心の奥底に突き通って、魂の根幹まで達します。」

●4・8　聖週間の水曜日の一般謁見で、聖なる三日間についてのお話。

「この三日間で、私たちはイエズスの受難と死と復活に心を込めてあずかり、それらを再体験します。」

聖香油のミサで「聖木曜日が始まります。病人と洗礼志願者のために香油が祝別されます。この儀式は、キリスト信者の心を奮い立たせる全教会の交わりと、キリストの司祭職の完成を象徴しています。」

木曜日の夕方、「私たちは聖体の制定を祝います。」

ミサの終わりに、「聖体拝領の前にはこの測り知れない素晴らしい愛の秘義を黙想し、絶えず賛美を捧げるよう教会は呼びかけています。」

「聖金曜日には受難の朗読があり、十字架に心を潜めます。」「死の象徴ではなく、真の生命の源である十字架の崇拝が、この日の典礼の焦点となります。」

「これら聖なる秘義を黙想しつつ、私たちは沈黙のうちに聖土曜日へと向かいます。…墓の傍らで、私たちは主がいなければ孤独と悲嘆に打ち負かされてしまうであろう人類の悲劇を思います。マリアと共に、希望のうちに復活を待ちましょう。」

「聖土曜日の夜、荘厳な復活徹夜祭で、喜びの歌が沈黙を破ります。再び光が闇に打ち勝ち、生命が死に勝ったことが宣言され、教会は主との出会いに歓呼します。こうして私たちは復活祭の頂点、死からよみがえった主が全てを新たにする永遠の日に足を踏み入れるのです。」

●同日、カテケージスのお話の後。聖ザベリオ宣教会が進めているアフリカでの宣教キャンペーンに携わる人々に「心からの挨拶」を送られた。

「バスコ・ダ・ガマのアフリカ周航五百年を機会に、相互の敬意に基づく新たな連帯をアフリカの人々との間に築く意図があります。アフリカの人々の尊厳を尊重し、対外債務の解消を筆頭にした政治的役割と豊かな文化に期待しつつ、人々が自ら発展の担い手となれるよう、協力する考えです。」

●4・17　シェーンスタット家庭協会の人々へ。

自分も大家族の中で育ったことをお話しになってから、「皆さんのような生き生きとしたすばらしい家庭が数多くあることを目前にし、とても嬉しく思います。…家庭には何ができるか、何をしなければならないか。神のご計画によると、それは生命と愛の共同体であれ、ということです。」「家族の中では、互いを〈神からの贈り物〉として受け入れます。だから、一人ひとりがどんなに違っていても家族は一致しており、家庭は平和のうちに生きることを学ぶ場となります。家庭では愛の雰囲気のうちに赦しを経験することができます。」「召し出しが生まれ、育つのも家庭の中です。」

「教皇様の聲」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙
■毎月10日発行　■定価：送料とも一部186円　■年内定期購読：送料とも一部2,087円
詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会　〒659-0093 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448